

# 一代聖教大意

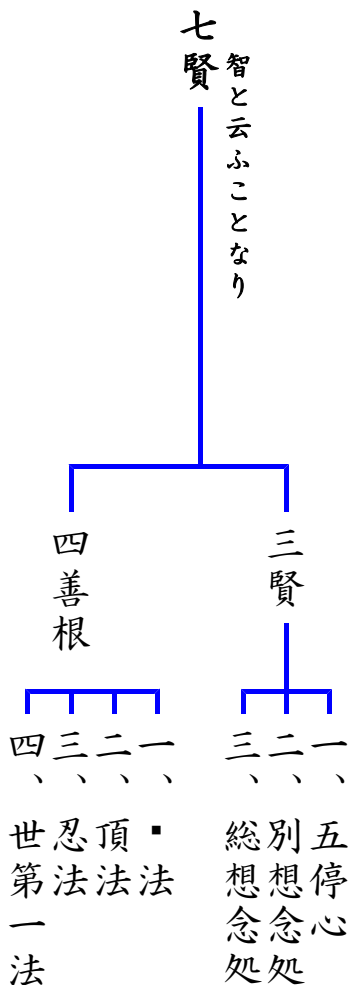
(一代大意抄)

正嘉二年二月一四日

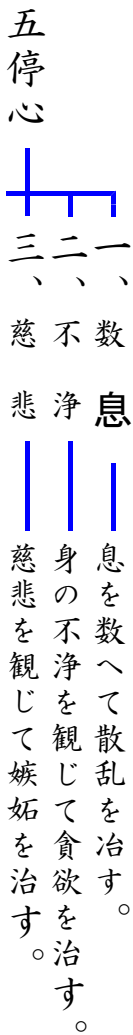
三七歳

四教。一には三蔵教、二には通教、三には別教、四には円教なり。始めに三蔵教とは、阿含經の意なり。此の教の意は六道の外を明かさず。但六道を明かすなり。畜・修・天・人の因果の道理を明かす。但し正報は依報が六にて有れば六界と申すなり。此の教の意は六道より外を明かさず。ば、三界より外に浄土と申すなり。此の教の意は六道より外を明かさず。世すとは云へども、横に十方に並べて仏有りと云はず。又三世に仏は次第第に出る。蔵亦定蔵とも云ふ。二には律蔵亦戒蔵とも云ふ。三には論蔵亦慧蔵とも云ふ。但し經律論の定戒慧・戒定慧・慧定戒と云ふ事あるなり。戒蔵とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり。定蔵とは味禪・定とも名づく。浄禪・無漏禪なり。慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧なり。

戒定慧の勝劣と云ふは、但上の戒計りを持つ者は三界の内の欲界の人天に生受ける凡夫なり。但上の定計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依つて上の戒を具するなり。此の定の内に味禪・浄禪は三界の内の色無色界に生ず。無漏禪は声聞・縁覺と成りて見思を断じ、尽くし灰身滅智するなり。慧は又苦・空・無常・無我と我が色身を觀すれば、定より慧勝れたり。然れども此の三蔵教の意は戒が本体にてあるなり。されば阿含經を總括する遺教經には戒を説けるなり。此の教の意は依報には六界、正報には十界を明かせど縁覺・菩薩・仏も声聞の覺りを過ぎざれば但声聞教と申す。されば仏も菩薩も縁覺も灰身滅智する教なり。六道は凡夫なり。声聞に付いて七賢七聖の位あり。



此の七賢の位は六道の凡夫より賢く、生死を厭ひ、煩惱を具しながら煩惱を發こさざる賢人なり。例せば外典の許由・巢父が如し。



四、因縁  
十二因縁を觀じて愚痴を治す。  
亦は念仏  
五、界方便  
地水火風空識の六界を觀じて障道を治す。  
と云ふ

## 別想念処

一、身  
二、受  
三、心  
四、法

外道は身を淨と云ひ、仏は不淨と説きたまふ。  
外道は三界を樂と云ひ、仏は苦と説きたまふ。  
外道は心を常と云ひ、仏は無常と説きたまふ。  
外道は一切衆生に我有りと云ひ、仏は無我と説きたまふ。

外道は常心樂受我法淨身、仏は苦・不淨・無常・無我と説く。  
總想念処  
先の苦・不淨・無常・無我を調練して觀ずるなり。

法  
智慧の火、煩惱の薪を蒸せば煙の立つなり。故に法と云ふ。  
頂  
山の頂に登りて、四方を見るに雲り無きが如し。世間出世間

の因果の道理を委しく知つて闇り無き事に譬へたるなり。  
始め五停心より此の頂法に至るまでは、退位と申して惡縁に  
値へば惡道に墮す。而れども此の頂法の善根は失せずと習ふ  
なり。

忍法  
世第一法  
此の位に入る人は永く惡道に墮ちず。  
此の位に至るまでは賢人なり。  
但し今に聖人と成るべきなり。

一、見道に二  
随信行 鈍根  
随法行 利根

一、信解 鈍根

二、見得 利根  
三、身証 利鈍に亘る

阿羅漢

三、無學道に二

慧解脱 鈍根  
俱解脱 利根

見思の煩惱を斷ずる者を聖と云ふ。此の聖人に三道あり。見道とは見思の  
内の見惑を斷じ盡くす。此の見惑を盡くす人をば初果の聖者と申す。此の人  
は欲界の天人には生ずるとも、永く地餓畜修の四惡趣には墮ちず。天台云は  
く「見惑を破するが故に四惡趣を離る」文。此の人は未だ思惑を斷ぜず、貪  
瞋癡身に有り。貪欲あるが故に妻を帶す。而れども他人の妻を犯さず。信  
あれども物を殺さず。鋤を以て地をすけば虫自然に四寸を去る。愚癡なる故

に我が身初果の聖者とは知らず。婆娑論に云はく「初果の聖者は妻を八十一  
度一夜に犯す」取意。天台の解釈に云はく「初果、地を耕すに虫四寸を離  
るゝは道共の力なりと。第四果の聖者阿羅漢を無學と云ひ、亦は不生と云ふ。  
永く見思を断尽して三界六道に此の生の尽きて後は生ずべからず。見思の煩  
悩無きが故なり」と。又此の教の意は三界六道より外に処を明かさざれば外  
の生処有りと知らず。身に煩惱有りととも知らず、又生因無く但灰身滅智と申  
して身も心もうせ虚空の如く成るべしと習ふ。法華經に「あずば永く仏になる  
べからず」と云ふは二乗是なり。此の經の修行の時節は、声聞は三生 鈍根  
六十劫 利根。又一類の最上利根の聲聞は一生の内に阿羅漢の位に登る事  
有り。縁覺は四生 鈍根 百劫 利根。菩薩は一向凡夫にて見思を断ぜず。  
而も四弘誓願を發し、六度万行を修し、三僧祇百大劫を経て三藏教の仏と  
成る。仏と成る時始めて見思を断尽するなり。見惑とは一には身見 亦我見  
とも云ふ、二には辺見 亦断見常見ともいふ、三には邪見 亦撥無見と  
も云ふ、四には見取見 亦劣謂勝見とも云ふ、五には戒禁取見 亦非因  
計因非道計道見とも云ふなり。見惑に八十八有れども此の五が本にて有る  
なり。思惑とは一には貪、二には瞋、三には癡、四には慢なり。思惑には八  
十一有れども此の四が本にて有るなり。別して俱舍宗と申す宗有り。涅槃經  
百卷・正理論・顯宗論・俱舍論具に明かせり。此の法門は阿含經四十卷・婆沙論二  
又諸の大乗に此の法門少々明きらめたる事有り。謂はく方等部の經・涅槃經  
等なり。但し華嚴・般若・法華には此の法門無し。此の教のおきて大旨  
は六道を出でず。大乘の始めなり。又戒定慧の三學あり。此の教のありて大旨  
は六道を出でず。少分利根なる菩薩、六道より外を推し出だすことあり。声  
聞・縁覺・菩薩共に一つ法門を習ひ、見思を三人共に断じ、而も声聞・縁覺  
・灰身滅智の意ひに入る者もあり、入らざる者もあり。此の教に十地あり。

一、乾慧地 三賢

賢人

二、性地 四善根

三、八人地

見道の位 聖人

見惑を断ず

四、見地  
五、薄地

初果の聖人

十地

六、離欲地

思惑を断ず

見思を断じ尽くす

七、已弁地 阿羅漢

見思を尽くす

八、辟支仏地  
九、菩薩地  
十、仏地

見思を断じ尽くす

此の通教の法門は別して一經に限らず。方等經・般若經・心經・觀經・阿  
彌陀經・雙觀經・金剛般若經等の經に散在せり。此の通教の修行の時節は、  
動・上・聞・縁覺・菩薩・仏とおもひおもひに成ると談ずる教なり。始めて修すれば声  
聞・縁覺・菩薩・仏とおもひおもひに成ると談ずる教なり。

次に別教。又戒定慧の三學を談ず。此の教は但菩薩許りにて声聞縁覺を雜  
へず。菩薩戒とは三聚淨戒なり。五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒。

梵網の五十八の戒・瓔珞の十無尽戒・華嚴の十戒・涅槃經の自行の五支戒・護他の十戒・大論の十戒。是らは皆菩薩の三聚淨戒の内摂律儀戒なり。撰善法戒とは八万四千の法門を摂す。饒益有情戒とは四弘誓願なり。定とは觀・練・薰・修の四種の禪定なり。慧とは心生十界の法門なり。五十二位を立つ。

五十二位とは一には十信、二には十住、三には十行、四には十回向、五には十地、等覺一位、妙覺一位、已上五十二位。

五十二位  
十回向  
不退位  
見思・塵沙を断ぜる菩薩

十住	不退位	見思・塵沙を断ぜる菩薩
十行	不退位	
十回向	不退位	
十地	無明を断ぜる菩薩	
等覺	無明を断ぜる菩薩	
妙覺	無明を断尽せる仏	

此の經は大乗なり。戒定慧を明かす。戒とは前の藏通二教に似ず、尽未來際  
の戒、金剛法戒なり。此の教の菩薩は三惡道を斷ぜず、二乗の道は佛の種子  
を斷つ。大莊嚴論に云はく、「恒に地獄に處すと雖も、大菩提を障へず。若し自  
利の心を起さば、是大菩提の障りなり」と。この經の習ひは眞の惡道とは三  
無爲の火なり。眞の惡人とは二乗を立つるなり。されば惡をば造るとも、  
二乗の戒をば持たじと談ず。故に大般若經に云はく、「若し菩薩設ひ・伽沙劫  
に妙なる五欲を受くとも、菩薩戒に於て猶犯と名づけず。若し一念二乗の心  
を起さば、即ち名づけて犯と爲す」文。此の文に妙なる五欲とは色・聲・香・味・觸  
の五欲なり。色欲とは青・黛・珂雪・白齒等、聲欲とは糸・竹・管・絃、香欲とは沈  
檀・芳薰、味欲とは猪鹿等の味、觸欲とは軟・膚等なり。此に・伽沙劫の著すと  
も、菩薩戒は破れず、一念の二乗の心を起すに菩薩戒は破ると云へる文なり。  
太賢の古迹に云はく、「貪に汚さると雖も、大心尽きざるをもつて、無余の犯無き  
が故に無犯と名づく」文。二乗戒に趣くを菩薩の破戒とは申すなり。華嚴・  
般若・方便等、總じて爾前經には、あながちに二乗をきらうなり。定慧は此を略  
す。梵網經に云はく、「戒をば謂ひて平地と爲し、定をば謂ひて室宅と爲す、  
智慧は爲れ、燈明なり」文。此の菩薩戒は人・畜・黃門・二形の四種を嫌はず、  
但一種の菩薩戒を授く。此の經の意は五十二位を一生に佛に成る物無し。一行を  
衆生界を尽くして佛に成るべし。一人として一生に佛に成る物無し。一行を  
以て佛に成る事無し。一切行を積みて佛と成る。微塵を積みて須彌山と成る  
が如し。華嚴・方便等、般若・梵網・瓔珞等の經に、此の旨分明なり。但し二乗  
界の此の戒を受くる事を嫌ふ。妙樂の釈に云はく、「遍く法華已前の諸經を尋  
ぬるに、實に二乗作佛の文無し」文。

次に円教。此の円教に二有り。一には爾前の円、二には法華涅槃の円なり。爾前の円に五十二位又戒定慧あり。爾前の円とは華嚴經の法界唯心の法門なり。文に云はく「初發心の時便ち正覺を成ず」と。又云はく「円滿修多羅」せす。文。淨名經に云はく「無我無造にして受くる者は無けれども、善惡の業敗亡せず」文。般若經に云はく「初發心より即ち道場に坐す」文。觀經に云はく「韋提希時に應じて即ち無生法忍を得」文。梵網經に云はく「衆生仏戒を受くれば位大覺に同じ。即ち諸仏の位に入り、眞に是諸仏の子なり」文。此は皆爾前の円の証文なり。此の教の意は又五十二位を明かす。名は別教の五十二位の如し、但し義はかはれり。其の故は五十二位が互ひに具して淺深も無

し勝劣も無し。凡夫も位を経ずとも仏にも成る、又往生するなり。煩惱も断ぜざれども仏に成るに障り無く一善一戒を以ても仏に成る。少々開会の法門を説く処もあり。所謂浄名経には凡夫を会す。煩惱惡法も皆会す。但し二乗を会せず。般若經の中には二乗の所学の法門をば開会して二乗の人と惡人をば開会せず。觀經等の經に凡夫一毫の煩惱をも断ぜずして往生すと説くは皆爾前の円教の意なり。法華經の円教は後に至つて書くべし。已上四教。

次に五時。五時とは一に華嚴經、結經は梵網經、別円二教を説く。二には阿含、結經は遺教經、但三藏教の小乗の法門を説く。三には方等經・宝積經・觀經、等の説時を知らざる大乘經なり。結經は璣珞經、藏通別円の四教を皆説く。四には般若經、結經は仁王經、通教・別教・円教の後三教を説き三藏教を説かず。

華嚴經は三七の間の説、阿含經は十二年の説、方等・般若は三十年の説。已上華嚴より般若に至る四十二年なり。山門の義には方等は十六年、般若十四年と説處定まらず、般若經は三十年と申す。秘藏の大事の義には方等・般若は説時三百年。但し方等は前、般若は後と申すなり。仏は十九出家三十成道と定むる事は大論に見えたり。一代聖教五十年と申す事は涅槃經に見えたり。法華經已前四十二年と申す事は無量義經に見えたり。法の文の間を勘ふれば八箇年なり。已上十九出家、三十成道、五十年の轉法輪、八十入滅と定むべし。此等の四十二年の説教は皆法華經の汲引の方便なり。其の故は無量義經に云はく、「我先に道場菩提樹下にして端坐するること六年、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。」○方便力を以て四十余年には末だ眞實を顯はさず。〇初めに四諦を説き、阿含經なり。○次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く一文。私に云はく、説の次第に順ずれば華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃と列ぬべし。法門の淺深の次第を列ねば阿含・方等・般若・華嚴・法華涅槃と列ぬべし。されば法華經・涅槃經には爾の如く見えてたり。華嚴宗と申すは智儼法師・法蔵法師・澄觀法師等の大師、華嚴經に依つて立てたり。俱舍宗・成実宗・律宗は宝法師・光法師・道宣等の大師、阿含經に依つて立てたり。法相宗と申す宗は玄奘三蔵・慈恩法師等、方等部の内の上生經・下生經・成仏經・深密經・解深密經・瑜伽論・唯識論等の經論に依つて立てたり。三論宗と申す宗は般若經・百論・中論・十二門論・大論等の經論に依つて立てり。吉蔵大師立て給へり。華嚴宗と申すは華嚴と法華・涅槃は同じ円教と立つ。余は皆劣ると云ふなるべし。法相宗には深密・解深密經と華嚴・法華・涅槃は同じ程の經なり、但し法相の依經の諸の小乗經は劣なりと立つ。

此等は皆法華已前の諸經に依つて立てたる宗なり。爾前の円を極として立てたる宗どもなり。宗々の人々の諍ひは有れども經々に依つて勝劣を判ぜん時はいかにも法華經は勝れたるべきなり。人師の釈を以て勝劣を論ずること無し。

五には法華經と申すは開經には無量義經一卷、法華經八卷、結經には普賢經一卷。上の四教四時の經論を書き挙ぐる事は此の法華經を知らんが爲なり。法華經の習ひとしては前の諸經を習はずしては永く心を得ること莫きなり。



爾前の諸經は一經一經を習ふに又余經を沙汰せざれども苦しからず。故に天台の御釈に云はく「若し余經を弘むるには教相を明らかにせざれども義に於て傷むこと無し。若し法華を弘むるには教相を明らかにせざれば文義欠くること有り」文。法華經に云はく「種々の道を示すと雖も其れ實には法華經の爲に一切の種々の道と申すは爾前の一切の諸經なり。仏乗の爲とは法華經の爲に一切の經を説くと申す文なり。」

問ふ、諸經の如きは或は菩薩の爲、或は人天の爲、或は聲聞緣覺の爲、機に随つて法門もかわり益もかわる。此の經は何なる人の爲ぞや。答ふ、此の經は相伝に有らざれば知り難し。惡人善人・有智無智・有戒無戒・男子女人、四趣八部・總じて十界の衆生の爲なり。所謂惡人は提婆達多・妙莊嚴王・阿闍世王・善人は韋提希等の天人の人。有智は舍利弗・無智は須利槃特。有戒は聲聞・菩薩・無戒は竜・畜なり。女人は竜女なり。總じて十界の衆生、円の一法を覺るなり。此の事を知らざる學者、法華經は我等凡夫の爲には有らずと申す、仏意恐れ有り。此の經に云はく「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に屬せり」文。此の文の菩薩とは、九界の衆生、善人惡人女人男子・三藏教の聲聞・緣覺・菩薩・通教の三乗、別教の菩薩、爾前の円教の菩薩、皆此の經の力に有らざれば仏に成るまじと申す文なり。又此の經に云はく「藥王、多く人有りて在家出家の菩薩の道を行ぜんに、若し是の法華經を見聞し誦誦し書持し供養すること得ること能はずんば、當に知るべし、是の人には未だ善く菩薩の道を行ぜず。若し是の經典を聞くこと得ること有らば、動喻塵劫・無量阿僧祇劫の間の六度万行・四弘誓願は、此の經に至らざれば菩薩の行には有らず、善根を修したるにも有らずと云ふ文なり。又菩薩の行無ければ、仏にも成らざる事も顯然なり。天台妙樂の末代の凡夫を勧進する文、文句に云はく「好堅、地に処して芽已に百圍せり。頻伽、凡に在つて声衆鳥に勝れたり」文。此の文は法華經の五十展轉の第五十の功德を釈する文なり。仏苦ろに五十展轉にて説き給ふ事、權教の多劫の修行又大聖の功德より、も、此の經の須臾結縁、愚人の隨喜の功德、百千万億倍勝れたる事經に見えつれば、此の意を大師譬へを以て顯はし給へり。好堅樹と申す木は一日に百圍にて高く生ふ。頻伽と申す鳥は幼きだも諸の大小の鳥の聲に勝れたり。權教の修行の久しきに頻伽と申す鳥の遅く生長するを譬へ、法華の行速やかに仏に成る事を一日に百圍なるに譬ふ。權教の大小の聖をば諸鳥に譬へ、法華の凡夫のはかなきを、の聲の衆鳥に勝るに譬ふ。妙樂大師重ねて釈して云はく「恐らくは人謬りて解せる者、初心の功徳の大なることを測らずして功を上位に推す、此の初心を蔑る。故に今彼の行浅く功深きことを示して、以て經力を顯はす」文。末代の愚者は法華經は深理にして、いみじけれども、我が機に叶はずと云ひて法を挙げ機を下して退する者を釈する文なり。又妙樂大師末代に此の法の捨てられん事を歎きて云はく「此の円頓を聞きて、而も崇重せざる者は、良に近代に大乘を習へる者の雜濫するに由るが故なり。況んや像末に情澆く信心寡薄に、円頓の教法、蔵に溢つれども暫くも思惟せず、便ち目を瞑ぐに至る。徒に生じ徒に死す、溢れ函に盈つれども暫くも思惟せず、便ち還つて法を恒沙の如きを得る者、殊に勝れたる。法を聞かざる者、以て而も校量と爲り。法を聞くことを得ると。此は供仏し法を聞かざる者を以て而も校量とせんをや」と。又云はく「一句も神に染みぬれば、咸く彼岸を資く。思惟修習

姚興王に對して曰く、予昔天竺國に在りし時、遍く五竺に遊んで大乘を尋討し、大師須利耶蘇摩に従つて理味を餐受するに頂を摩でて此の經を属累して言はく、仏日、西に隠れ遺光東北を照す。茲の典、東北諸國に有縁なり。汝慎んで伝弘せよ」文。私に云はく、天竺よりは此の日本は東北の州なり。慧心の一乗要決に云はく「日本一州円機純熟にして、朝野遠近同じく一乗に歸し、緇素貴賤悉く成仏を期す。唯一師等あて若し信受せずば權とや為さん」とや為さん。權と為さば貴むべし。淨名に云く、衆の魔事を覺智して而も其の行に随はざるは善力方便を以て意に随つて而も度すと。実と為さば憐れむべし。此の經に云はく、当來世の惡人は仏説の一乗を聞きて迷惑して信受せず、法を破して惡道に墮つ」文。

妙とは天台の玄義に云はく「言ふ所の妙とは妙は不可思議に名づくるなり」と。又云はく「秘密の奥蔵を發く、之を稱して妙と為す」と。又云はく「妙」とは最勝修多羅甘露の門なり、故に妙と言ふなり」と。法とは玄義に云はく「言ふ所の法とは十界十如權実の法なり」と。又云はく「權実の正軌を示す、故に号して法と為す」と。蓮華とは玄義に云はく「蓮華とは權実の法に譬ふるなり」と。又云はく「久遠の本果を指す、之を喩ふるに蓮を以てし、不二の円道に會す、之を譬ふるに華を以てす」と。文。經とは玄義云はく「声仏事を為す、之を稱して經と為す」と。文。私に云はく、法華以前の諸經に、小乗は心ならずれば六界、心滅すれば四界なり。通教以て是くの如し。爾前の別円の二教は心生の十界なり。小乗の意は六道四生の苦樂は衆生の心より生ずと習ふなり。されば心滅すれば六道の因果は無きなり。大乘の心は心より十界を生ず。華嚴經に云はく「心は工みなる絵師の如く種々の五陰を造る。一切世間の中に法として造らざること無し」と。文。種々の五陰を造るとは十界の五陰なり。仏界をも心法をも造ること習ふ。心が過去現在未來の十方の仏と顯はると習ふなり。華嚴經に云はく「若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば当に是くの如く觀ずべし、心は諸の如来を造る」と。法華以前の經のおきては上品の十惡は地獄の引業、中品の十惡は餓鬼の引業、下品の十惡は畜生の引業、五常は修羅の引業、三歸五戒は人の引業、三歸十善は六欲天の引業なり。有漏の坐禪は色界無色界の引業、五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦・空・無常・無我の觀は聲聞・緣覺の引業、五戒・八戒・乃至三聚淨戒の上には六度・四弘の菩提心を發こすは菩薩なり。仏界の引業なり。藏通二教には仏性の沙汰無し、但し菩薩の發心を仏性と云ふ。別円の二教には衆生に仏性を論ず、但し別教の意は二乗には仏性を論ぜず。爾前の円教は別に附して二乗の仏性の沙汰無し。此等は皆鹿法なり。

今の妙法とは此等の十界を互ひに具すと説く時、妙法と申す事は十界の内に一界に余の九界を具し十界互具すれば百法界なり。玄義二に云はく「又一法界に九法界を具すれば即ち百法界有り」文。法華經とは別の事無し。十界の因果は爾前の經に明かす、今經は十界の因果互具をおきてたる計りなり。爾前の經意は菩薩をば仏に成るべし声聞は仏に成るまじなんど説けば、菩薩は悦び声聞はなげき人天等はおもひもかけずなんどある經





より隨身の鑰を以て開き給ひしに、此の經藏開きたりしかば經藏の内より光  
室に満ちたりき。其の光の本を尋ねれば此の一念三千の文より光を放ちたり  
しなり。ありがたかりし事なり。其の時邃和尚は返りて伝經大師を礼拝し給  
ひき。天台大師の後身と云云。依つて天台の經藏の所釈は遺り無く日本に亘りし  
なり。天台大師の御自筆の觀音經、章安大師の自筆の止觀、今比叡山の根本  
中堂に収めたり。

#### 四性計

一 自性 自力 迦毘羅外道  
二 他性 他力 樓僧伽外道

三 共性 共力 勒婆婆外道  
四 無因性 無因力 自然外道

外道に三人あり、一には仏法外の外道、九十五種の外道、二には學佛法  
成の外道、小乗、三には附佛法の外道、妙法を知らざる大乘の外道なり。

今の法華經は自力も定めて自力にあらず、十界の一切衆生を具する自なる  
故に。我が身に本より自の仏界、一切衆生の他の仏界我が身に具せり。され  
ば今仏に成るに新仏にあらず。又他力も定めて他力に非ず。他仏も我等凡夫  
の自ら具せる故に、又他仏が我等が如き自に現同するなり。共と無因とは略  
す。法華經已前の諸經は十界互具を明かさざれば、仏に成らんと願ふには必  
ず九界を厭ふ、九界を仏界に具せざる故なり。されば必ず惡を滅し煩惱を断  
じて仏には成ると談ず、凡夫の身を仏に具すと云はざるが故に。されば人天、  
惡人の身をば失ひて仏に成ると申す。此をば妙樂大師は厭離断九の仏と名づ  
く。されば爾前の經の人々は仏の九界の形を現ずるをば、但仏の不思議の神  
變と思ひ、仏の身に九界が本よりありて現ずるとは云はず。されば實を以て  
さぐり給ふに法華經已前には但權者の仏のみ有りて、實の凡夫が仏に成りた  
りける事は無きなり。煩惱を断じて九界を厭ひて仏に成らんと願ふは、實に  
は九界を離れたる仏は無き故に。往生したる實の凡夫も無し、人界を離れた  
る菩薩界も無き故に。但法華經の仏の、爾前にして十界の形を現じて、所化  
とも能化とも、惡人とも善人とも外道とも云はれしなり。實の惡人・善人・化  
外道・凡夫は方便の權を行じて、眞實の教とうち思ひなしてすぎし程に、法華  
經に來たりて方便にてありけり、實には見思無明も断ぜざりけり、往生もせ  
ざりけりなり。一念佛三千は別に委しく書くべし。

此の經には二妙あり。釈に云はく「此の經は唯二妙を論ず」と。一には相  
待妙・二には絶待妙なり。相待妙の意は、前四時の一代聖教に法華經を對し  
て爾前と之を嫌ひ、爾前をば当分と云ひ法華經を跨節と申す。絶待妙の意は、  
一代聖教は即ち法華經なりと開會す。又法華經に二事あり。一には所開、二  
には能開なり。開示悟入の文、或は皆已成仏道等の文、一部八卷二十八品六  
万九千三百八十四字、一々の字の下に皆妙の文字あるべし。此能開の妙なり。  
此の法華經は知らずして習ひ談ずる物は但爾前經の利益なり。阿含經の開會  
の文は、經に云はく「我が此の九部の法は衆生に隨順して説く、大乘に入る  
に為れ本なり」云云。華嚴經開會の文は「一切世間の天人及び阿修羅は皆謂  
へり今の釈迦牟尼云々。般若經開會の文は「安樂行品の十八空の文なり。謂  
觀經等の往生安樂開會の文は「一たび南無仏と稱せし終して即ち安樂世界に往く」等  
文。散善開會の文は「今此の三界は皆是我が有なり。其の中の衆生は悉く是吾が  
衆生開會の文は「外典開會の文は「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を  
子なり」と。

説かんも皆正法に順ぜん一文。兜率開会の文、人天所開会の文、生ぎゆへに  
いださず。或いは兜率・利なんどにいたる文を見、或は安養に生ずる文を見  
文を見、或いは法華を行ぜば、五十六億七千萬歳の晨を期し、或は人畜等に生  
て穢土に於て流転し、久しく五十六億七千萬歳の晨を期し、或は人畜等に生  
ば穢土に於て流転し、久しく五十六億七千萬歳の晨を期し、或は人畜等に生  
じて隔生する間、自らの苦しみに限り無し、なんど云云。或は自力の修行なり難  
行道なり等云云。此は恐らくは爾前法華の二途を知らずして自身癡闇に迷ふ  
のみに非ず一切衆生の仏眼を閉づる人なり。兜率を勧めたる事は、大乘經に多  
し。少しは大乗經にも勧めたり。西方を勧めたる事は、大乘經に多し。此等は  
皆所開の文なり。

法華經の意は、兜率に即して十方仏土中、西方に即して十方仏土中、人天  
に即して十方仏土中云云。法華經は惡人に対しては十界の惡を説けば、惡人五  
眼を具し、なんどすれば、惡人のきわまりを救ひ、女人に即して十界を説けば、  
十界皆女人なる事を談ず。何にも法華円実の菩提心を發こさん。法然上人も一  
界へ業力に引かる事を無きなり。此の意を在じ給ひけるやらん。法然上人も一  
向念仏の行者ながら、選択と申す文には、難行道には法華・大日經等をば  
除かれたる所も有り、委しく見よ。又慧心の往生要集にも法華經を除きたり。  
たとひ法然上人・慧心、法華經を難行道として末代の機に叶はずと書し  
給ふとも、日蓮は全くもちゆべからず。一代聖教のおきてに違ひ、三世十方  
の仏陀の誠言に違する故に。いわうやそのぎ無し。而るに後の人々の消息に、  
法華經を難行道、經はいみじけれども末代の機に叶はず、謗せばこそ罪にて  
も有らめ、浄土に至りて法華經をば覺るべしと云云。日蓮の心はいかにも此  
の事はひが事と覺ゆるなり。かう申すもひが事にや有るらん。能く能く智人  
に習ふべし。

正嘉二年二月十四日

日蓮撰